

奥田 それは入試だ。故に総選挙は中止（白紙撤回）でもよい。

全寮制は学校を破壊するのが目的である。理事会の方向に従う。

森 九人の人の意見書は精神錯乱と考えてよいという人と、主体的に書いたものだという人がある。それを一般学生にも説明すべきだ。

山元 理事者が寮との交渉に出席しなかった点が問題である。九人の人は強制されたと思う。又、書いた時の主体性より我々は客観的に考えるべきだ。拡大補導会議として出るのでなく理事会として出るべき。どのような方向で出るべきか。

議長 ①大学に対する不信を取り除くことで意見が一致している。②寮連合との交渉に入るべきだとするが、全学生の前で交渉すること。話し合いに入ってから封鎖を解く。全学生が結集すること。それとも封鎖を解いてから話し合いに入るか。

大谷 理事会が封鎖を解く日時を明確にしない限り交渉に入るなど昨日決定している。

小関 全共闘は産社教授会を糾弾することがないのか。放っておけば拡大するのではないか。

議長 理事会が交渉に入ってから一般学生に聞かせる事が結集した力が出る。

奥田 学生に不信がある。それが大学側の不手際だからそれを明らかにすること。

小関 大学側の不手際を認めるのなら寮連合と会うことはよい。しかし一般学生に聞かすべきかどうか、寮連合とするのなら……

武並 状態判断が甘い。一般学生が多い。（中間に）①実力②交渉の条件をのむ。又は警察力導入の二つしかない。私は三派の要求のほとんどをのむことを主張する。

山元 結束思想を避けるようにしては如何。

梅原教授の談話

今回辞職を決意した要因は三つあります。一つは、二二日の実力封鎖解除といった事態になって林屋文学部長が辞職したこと、僕は学部長の「平和路線」を支持してきた者として辞職を決意したわけです。

もう一つは、立命館内部にあった一党独裁というか官僚主義が表面化したことです。

三つ目は、以前から感じていたことです。現在の大学制度が非常にマスプロ化してきて、真の対話に基づいた教育ができないということ。辞任を決意した今、一個人として自由にここ（中川会館）に来ているわけですが、立命館を愛する気持は決して変ったわけではありません。

学内に蔓延するドス黒い陰謀の数々を裏付けするかのようによ生し続ける様々の事件、その行動を主導する者達の学内支配、一風前の灯たる体制のみにくい支配者の顔が自信なさげにさらされ、そこから脱出しようとする者の真剣な姿。「全国で最も民主化された立命館大学の内実はこのようなものであった。

当局から加えられる陰謀の一切を粉碎しながら、寮連合、そして全共闘（準）に結集する各学部闘争委員会、理事会との大衆団交を要求し続けてゆく。既に文学部日本史学科では研究室の自主管理闘争に入っており、産業社会学部闘争委員会、理工学部クラス連合、経営学部執行委員会、法学部闘争委員会、文学部闘争委員会等、各学部の個別的課題を模索しながら、擬制「立命館民主主義」の徹底的な追究・解体の方向へ闘争は進められていく。

五、展開／二重権力下の無血革命
大衆団交／集會民主主義の登場

一月二九日から三〇日にかけて開催される寮連合と理事会との大衆団交を境にして立命館全共闘運動第三期学園闘争は、明らかに転期を迎える。二月九日に、全学共闘会議が正式に結成されるまでの十日間は、立命館学園史のなかでも最も充実したときであった。各学部、各段階で、クラス討論から学生大会までの様々な集會が開かれ、寮闘争が、単なる理事会の学寮政策の負しさの問題ではなく進行する教育、大学再編のなかで、立命館民主主義が体制化しつつある事への根柢からの批判へとたかめられる。

開かれた大衆団交は、それをいみじくう理事会の全学協一学協の線の制度上の破産を意味し、学友会執行部は、あつく学生大会の敗北で、砂上の楼閣と化する。旧来の立命館民主主義体制と、集會民主主義に依る革命的な力との二重権力が、結集するべきであった。た昔にわたって生命を有してきた大学とその体制の改革は、いかに平和的に（かつ民主主義的に）「無血革命」として遂行されるかに、この十日間の特徴がある。つまり、この十日間は、徹底した集會民主主義によって、過渡期をしるしたのだ。

一月以来、民青系大衆運動、学友会執行部が「寮は厚生施設であり、寮連合の要求は、エゴイステックなもの」という宣伝は、学内の現状追認、無気力層に依拠する反革命への転落をあらわにし、代々木、民青は、キャンパスでの新たな連合を主体的に深めんとする多くの学友によってのりこえられるところとなる。（なお、代々木の宣伝についての批判は詳細に述べられるとして、1、六二年学費闘争に際し、敗北にあつて、なおかつとられた確認に、寮は教育的な観点から充実するという事項を、わざわざ復古にしていまい、2

以上の教授会議事録にも明らかのように、その討論の内容は寮連合の主張や全共闘（準）の主張を本質から理解しようとするものでは全くなく「どうしたら封鎖解除が出来るか云々」に終始し、やることといえば、学生に武器を与えて実力解除を行なわせ、失敗することができず、ひたすら自己の傷口を隠すのに一生けん命である彼ら教授連、まさにこのような状況の中で、文学部日本史学科を初めとする多数の非代々木系教授連の辞職がはじまる。

既に二二日に辞意を表明していた林屋辰三郎教授・山本幹男教授・佐々木高明助教授の文学部執行部三役に続き、文学部では梅原猛教授・奈良本辰也教授・北山茂夫教授・岩井忠熊教授・高野澄助手が相次いで辞職を表明し、とりわけ日本史学科は辞職教員が七名にのぼり、実質的に崩壊した。

彼ら非代々木系教授連の学内での立場が如何なるものであったかは、次の学園新聞紙上での談話が明らかにしてくれるだろう。

奈良本教授談話

私が辞意を出した大きな要因は、大学そのものに対する一つの疑問があり、この闘争の中で研究者としてか教育者としてか、といった私個人の問題が私自身に迫ってきたためだ。

辞意提出に至ったもう一つの要因は、学友会一派にゲバ隊等の資料を提供し平然としている大学当局に対し、何もでき得なかった自己の無力を表明することによって世にプロテストすることである。文学部教授として立命館は実に住みこちが悪い。他学部の教授会が一党一派の利害から、文、を白眼視するし、足を引っ張り全く孤立していた。それに秘密会議で話したことが三分もしたらある一部の学生に内容がもれている状態である。言論の自由がない。日本史研究室の自主管理は虚像化した現在の授業の崩壊作業であり、より高次のものを自ら作り上げる重大な基石である。